

Title	キャリア教育における大学と企業の連携のあり方
Author(s)	家島, 明彦
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/81428">https://doi.org/10.18910/81428</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## II. オンライン授業： 極めるアナリストたち



## キャリア教育における大学と企業の連携のあり方

大阪大学キャリアセンター副センター長

家島明彦

### はじめに

本稿は林田雅至先生の退職記念雑集寄稿レポートである。内容は、林田先生に繋いでいただいた「ご縁」に端を発した産学共創キャリア教育授業の実践報告である。具体的には、2020年度に新規開講された高度教養教育科目「現代キャリアデザイン論Ⅱ」のオンライン公開授業がどのようにしてできあがり、どのように実施され、どのような効果を生んだのかを報告するものである。将来的に大阪大学の名物授業になるであろう産学共創キャリア教育科目がどのようにして誕生したのか、その裏に林田先生がどのように関わっていたのかの記録である。

### 林田雅至先生（CO デザインセンター）との出会い

筆者と林田先生との出会いは、約3年前、正確には2018年2月7日（水）である。その日の昼休みに開催された大阪大学 CO デザインセンターのランチバッグセミナーで筆者が話題提供者として自身の研究（ビジュアル・ナラティブとしての人生双六）について発表したことが始まりであった。筆者の発表を聞いて面白がってくれた林田先生は、セミナー終了後すぐ筆者の研究室に来てくださり、約1時間お話しして帰っていかれた。林田先生の専門がポルトガル語であり、私の母が JICA 日系シニアボランティアでブラジルに日本語を教えに行っていて以来ポルトガル語の勉強を続けていたことなど、共通の話題も多数あり、とても話が盛り上がったのを覚えている。それまでは同じフロアに研究室がありながら、男子トイレですれ違うくらいの交流しか無かったのだが、この日を境に林田先生との交流が本格的に

始まり、加速し、3年間の間に様々な思い出を作ることになった。

その日から、林田先生は時折筆者の研究室を訪ねてくださり、お土産や興味深い資料を共有して下さるようになった。ご実家が長野ということで、筆者の好物である寒天ゼリー菓子「みすず飴」(上田名産)を差し入れてくれ、妻と小学生の子ども3人で大喜びしたこともあった。また、林田先生からのメールは情報量がものすごく、ハイパーリンクや添付資料の数が「ハンパない」ので、リンク先まで含めて全部読むのに時間がかかって大変だったが毎回とても勉強になった。林田先生との出会いは衝撃的であったが、その後も衝撃的であり続け、その教養と人脈の幅広さ、知識の奥深さには毎度感服するばかりであった。

#### 岡本栄理さん(株式会社オカムラ)との出会い

2018年5月8日(火)、林田先生から1通のメールが届く。株式会社オカムラの岡本栄理さんを紹介します、という内容であった。その2日後、なんと偶然にもグランフロント大阪でのミーティング予定ができ、岡本さんと会うことが実現するのだが、今思うと、これは運命の出会いだったのかもしれない。この出会いがなければ後述の「現代キャリアデザイン論II」が公開授業になることはなかったからだ。

林田先生から「岡本さんを紹介します」というメールが届いてから3日後、2018年5月11日(金)14時にグランフロント大阪にある株式会社オカムラの共創空間「Open Innovation Biotope "bee" (オープンイノベーションビオトープ・ビー)」を訪問し、岡本さんと出会った。その場には林田先生もおられ、わけも分からず引き合わされた二人に、様々な話題を提供して下さった。その後、岡本さんらが主催する生き方・働き方イベントに筆者と林田先生が参加したり、筆者が担当する大阪大学の授業にゲストとして岡本さんに来てもらったり、林田先生と岡本さんと一緒に他大学の訪問調査に行ったり、様々な異業種交流会に参加したり、関係を深めていくことになる。その中で岡本さんの人柄や才能を知り、産学共創の授業を彼女と一緒に創ってみよう、と思うようになった。

## 産学共創キャリア教育とは

産学共創キャリア教育とは、文字通り産業界と大学が共に創り上げるキャリア教育のことである。極論すれば、産業界のキャリア教育は就職・ワーク・働き方に偏りがちであり、大学のキャリア教育は理論や方法論など机上の空論に陥りがちである。そもそもキャリア教育というものが一般的に正しく理解されていないところがあり、仕事に関することならキャリア教育という誤解も少なくない。定義や目的は、文部科学省（中央教育審議会答申）の定義や日本キャリア教育学会のミッション・ステートメントを参照していただきたいが、とりわけ大学におけるキャリア教育については拙著『大学におけるキャリア教育とは何か』に記したので参考にしていただければ幸いである。忘れられがちなのは、キャリア教育とは働き方（Work）のみならず生き方（Life）も含んでいるということ、および、個人が個性を發揮してその人らしく人生を送れることを目指す教育であるということである。そのため、大阪大学のキャリア教育科目である「現代キャリアデザイン論Ⅰ」は理論と実践のバランス、インプットとアウトプットのバランスを考慮した構成となっている（家島, 2019）。

## 基盤教養教育科目「現代キャリアデザイン論Ⅰ」

林田先生および岡本さんとの出会いから新規開講に至った「現代キャリアデザイン論Ⅱ」の公開授業について説明する前に、その前からあった授業「現代キャリアデザイン論Ⅰ」や大阪大学の授業体系について説明しておく必要があるだろう。大阪大学には全学共通教育科目という授業（区分）があり、学部にかかわらず全ての学生が履修するようになっている。全学共通教育科目は、教養教育系科目、専門教育系科目、国際性涵養教育系科目の三本柱で構成されており、いわゆる一般教養の授業として新入生が多く履修する。教養教育系科目は、さらに基盤教養教育科目や高度教養教育科目など6つの科目から構成されている。「現代キャリアデザイン論Ⅰ」は基盤教養教育科目という区分の授業であり、全学部・全学年が対象である。一方、「現代キャリアデザイン論Ⅱ」は高度教養教育科目という区分の授業であり、全学部対象だが学年は2年次以上が対象である。「現代キャリアデザイン論Ⅰ」の開

講に至る経緯や授業内容については拙著『大学におけるキャリア教育とは何か』の1章に詳しく書いてあるし、シラバスもインターネット上で公開されているので、ここでの詳述は避けて「現代キャリアデザイン論Ⅱ」との違いを述べるだけにする。

ちなみに、「現代キャリアデザイン論Ⅰ」では産学共創キャリア教育の一環として第14回目に「事例研究（ケーススタディ）：社会人に学ぶ生き方・働き方」という回があり、複数の社会人ゲストに登壇いただく機会があるのだが、その登壇者の中には林田先生の紹介に端を発する人が少なくなかった。例えば、直接ご紹介いただいた方としては、岡本さんやナレッジキャピタルの印南敬介さん、そこから広がった「ご縁」で登壇に至った方としては、株式会社オカムラの遅野井宏さんや中山美菜子さんなどである。社会人ゲストを呼ぶ回は全15回の中で1回だけなので、より多くのロールモデルと交流してもらいたいという思いがあり、一度に6～8名の社会人ゲストをお招きし、約200名の受講生を20～30名のグループに分け、座談会形式で（社会人ゲストと受講生の距離が近い形で）15分×4セッション（後に18分×3セッション）というスタイルにしていた。しかし、毎回の社会人ゲストが豪華なメンバーだったので、「一人あたり十数分では勿体ない、社会人ゲスト一人ひとりのキャリア（生き方・働き方）を深く掘り下げて学生に聞かせたい」と考えるに至った。そこで、1回の授業でゲストは1名だけにして、話をじっくり聞くスタイルの授業を新たに始めることになったのである。

## 高度教養教育科目「現代キャリアデザイン論Ⅱ」

基盤教養教育科目「現代キャリアデザイン論Ⅰ」に続くキャリア教育科目として高度教養教育科目「現代キャリアデザイン論Ⅱ」を開講する計画は前からあったが、いよいよ2020年度に新規開講ということでシラバスを書く段階になった時、産学共創の授業とするためには産業界とのコラボレーションが必要不可欠であり、できれば産業界の人に授業担当者として加わってもらいたいと考えた。そして、筆者が選んだパートナーが、林田先生に紹介していただいた、株式会社オカムラの岡本栄理さんであった。株式会社オカムラは、働き方や働く場をさまざまなステークホルダーと共に考えていく活動「WORK MILL（ワークミ

ル)」プロジェクトを展開しており、岡本さんは関西の共創空間 bee を運営し、様々なイベントを主催していたからである。

授業の目的と概要は「人生 100 年時代における自分のキャリア（生き方・働き方）について改めて深く考えてもらうことが目的です。キャリア教育を専門とする大学教員からキャリアデザインの考え方や理論を学ぶと同時に、人生の先輩である社会人から様々な生き方・働き方の事例や進路・職業選択の方法を学びます。これらを通して、キャリアデザインに必要な知識・技能・態度を身につけてもらうことを目標とします。」と設定した。学習目標は「1. キャリアデザインの考え方や理論について具体的に説明できる（知識）、2. 自分のキャリアデザインについて図や文字を使って表現できる（技能）、3. 大学での学びを自らのキャリア（生き方・働き方）と関連づけることができる（態度）」と設定した。さらに、受講生へのメッセージには「この授業は就活のノウハウを教えることを目的とした授業ではありません。キャリア（生き方・働き方）について社会人の先輩から学び、改めて大学での学びを人生の中に位置づけてもらうことが目的です。心理学とキャリア教育学を専門とする大学教員（大阪大学キャリアセンター副センター長・准教授）家島明彦と、働き方改革や社会人の学びをプロデュースする企業人（株式会社オカムラ関西支社マーケティング部マーケティング推進室）岡本栄理が、阪大生に紹介したい個性豊かな豪華ゲストを迎えて、キャリア（生き方・働き方）について真剣に考える「場」を提供します。多様化・グローバル化する現代社会を生き抜くための知識・技能・態度、そして人脈を身につけてほしいと思っていますので、主体的・積極的に参加して下さい！」と記載した。

「現代キャリアデザイン論Ⅱ」のサブタイトルは「人生の先輩から多様な生き方・働き方を学ぶ」と設定した。受講した大学生が「自分も早く社会人になりたい！」とか「働くのってしんどいと思っていたけど、なんだか楽しそう！」とか思ってくれるような、魅力的な社会人ゲストを各分野から集めるべく、岡本さんと相談し、7 名の社会人ゲストを選定した。最終的には授業担当者である岡本さんと家島も話すことにし、合計 9 名の社会人から話を聴くことができるように授業を設計した。当初は対面の授業で大阪大学（豊中キャンパス）まで来てもらうつもりだったので、交通費と謝金の予算の都合で「関西圏在住」という条件のもと岡本さんに人選をお願いしたが、結果的には新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響でオンライン授業となった。そして、オンライン配信になったのであれば、せっかく

なので公開授業にして広く一般の方にも聞いていただこう、ということになった。かくして「現代キャリアデザイン論Ⅱ」はオンライン公開授業となった。（詳細はシラバス参照）

## オンライン公開授業

社会人ゲストが登場する第3回～第11回は公開授業とし、受講生以外の方は bee の申込サイト ([https://bee.workmill.jp/event/ou\\_careerdesign2.html](https://bee.workmill.jp/event/ou_careerdesign2.html)) を通じてエントリーしてもらった。結果的には、履修登録をした受講生（大半が学部2年生）約90名に加えて、社会人や他大学の学生が毎回20～30名参加した。また、最終的に年明けのディスカッション（授業の振り返り）3回（第13回～第15回）についても公開授業となった。

録画を視聴するだけの授業では退屈だし、ライブ感が大事だと考えて、Zoom ウェビナーによるリアルタイム配信型のオンライン授業を実施した。Zoom ウェビナーとは、その名の通りウェブ上でのセミナーに特化したアプリケーションである。参加者（視聴者）はカメラもマイクも基本的にオフのため顔も声もわからない。ホストとなる授業担当者2名、パネリストとなる社会人ゲスト1名の合計3名の顔と声（+投影スライド）を一方向的に配信することになる。そこで、チャットやQ&A（質疑応答のための機能）といった機能を駆使してリアルタイムに質問を受け付け、双方向的な対話や全体討論の場面も作るよう心がけた。また、年明けの授業については Zoom ミーティングを使い、ブレイクアウトルームという機能を使った少人数グループでのディスカッションや、参加者全員の顔が見える形での全体討論も実施した。さらに、毎回「全体的な感想」「学び・気づき」「疑問・質問」「改善要望」の4種類を CLE という大阪大学の授業支援システムから入力してもらい、翌週までに教員と社会人ゲストからのコメント（フィードバック）を書き込んだ Excel ファイルを返却（学生の感想は匿名化した上で受講生全員と共有）していた。学生の感想と教員の回答の合計文字数は平均12万文字であり、少ないときでも9万文字、多いときは15万字を超えていた。

オンライン公開授業は基本的に大阪大学豊中キャンパスにある家島研究室から配信しており、社会人ゲストはオンライン参加の場合もあれば、研究室まで来る場合もあった。ソーシャルディスタンス&アクリルボードで分断された授業担当者2名（と社会人ゲスト1名）

が同じカメラを見ながら画面に向かって話しかけるというスタイルであった。パソコンの画面（ディスプレイ）の正面に外付けカメラを配置し、なるべくカメラ目線になるよう工夫をしていた。また、チャットで社会人ゲストの話の補足・解説をしたり、参考 URL を貼り付けたり、オンラインならではの機能も活用して授業をサポートした。なお、録画記録とチャット記録は復習用として授業後に受講生と共有していた。

### オンライン公開授業の功罪

オンライン公開授業を実際にやってみて感じたメリットとデメリットを報告する。メリットとしては、①感染拡大リスクが減る、②常に最前列の感覚で視聴できる、③匿名で質問できる、④チャットによる補足や解説が理解を助ける、⑤移動にかかるコスト（時間とお金）を節約できる、⑥誰でも気軽に参加できる、などを挙げることができるだろう。①は大学のみならず、学生や社会人ゲストにとっての安心でもある。②～⑤は特に参加者にとってのメリットであるが、④は授業担当者にとっても有用なものであった。（⑤と）⑥は参加者の中でもとくに受講生ではない一般参加者にとってのメリットであった。これら①～⑥は授業のオンライン化による恩恵である。一方、公開授業になったことのメリットとしては、⑦他大学の学生や世代が異なる社会人の意見を聴くことができる、⑧良い意味で発言に緊張感が出てくる、⑨大学生と交流したり学び直しをしたりできる、などを挙げることができるだろう。⑦（と⑧）は受講生（学生）にとっての、（⑦と）⑧は授業担当者や社会人ゲストにとっての、⑨は一般参加者にとってのメリットである。

一方でデメリットも散見された。例えば、①授業後に希望学生も含めて食事会（授業の続き）ができるように月曜 5 時限に設定していたが実現できなかった、②参加者の顔（反応）が見えない、③タイピング速度が遅いと質問を書き込むのに時間がかかる、④インターネット回線が不安定になると接続切れになってしまう、などである。①と②は主として授業担当者や社会人ゲストにとってのデメリットであり、③と④は主として参加者にとってのデメリットである。①は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の問題、②は使用するシステムの問題、③は個人のスキルの問題、④は個人の環境の問題である。それぞれ全員が感じる

デメリットではなく、特定の人のみが気にするであろう（場合によっては気にしない、意に介さない人もいるかもしれない）デメリットである。もちろん他にも細々としたメリット、デメリットは枚挙に暇がない（例えば、社会人ゲストに支払う交通費が不要になる、服装等を気にせず「ながら」受講できる、アクリルボードの設置が大変だ、など）。

この授業では最終レポートとして受講生に①この授業を通して学んだこと（200字程度）、②今後の人生にどう活かすか（200字程度）、③この授業の全体的な感想（400字程度）、④この授業の良かったところ（100字程度）、⑤もっと良くなるどころ・改善点（100字程度）を書いてもらっている。④と⑤について AI テキストマイニングで3行要約をしたところ、以下の通りであった。④「ゲストスピーカーの方が丁寧に返答してくださっていたのもこの授業ならではの点だと思います。また、講義をする人たち以外にも社会人の方がたくさん参加しているところもよいと思いました。様々なバックグラウンド、経歴を持つ方々のお話を聞くことができたところが良かったと思います。」（89名分、合計14,249文字の3行要約）から、この授業の良かったところは「丁寧なフィードバック」「公開授業による一般参加者の存在」「魅力的な社会人ゲスト」に集約されると言えよう。また、⑤「自分の考えや意見を交換する場をブレイクアウトルームなどを活用して最初の回から設けてほしかった。実際の学生同士の意見共有では、言わない人は本当に何も言わないなと感じたからです。オンラインでは難しいかもしれないがもっといろんな人と交流する機会があっても良かったのかなと思う。」（89名分、合計12,494文字の3行要約）から、この授業の改善点は「意見を発表したり参加者同士で交流したりする機会の確保」に集約されると言えよう。

## 今後の展望

今回の社会人ゲストの話が素晴らしかったので、逐語録に加筆修正して書籍化することも検討している。また、2021年度も社会人ゲスト7名を入れ替え、基本的には同じ形式で（秋～冬学期の月曜5時限にオンライン公開授業として）実施する予定である。既に2021年度の社会人ゲストの選定は完了しており、打ち合わせの日程調整の段階に入っている。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が落ち着いていることを祈りつつ、偶然の産物とし

て誕生したオンライン公開授業という形式を今後も良い形で継続・継承していければいいなど考えている。履修登録した受講生以外の参加も歓迎なので、是非とも bee の [イベントページ](#) をチェックしておいていただきたい。この授業以外にも魅力的なイベントが盛り沢山なので、オススメである。

## おわりに

今回、林田雅至先生が定年退職されるということで「林田先生との思い出」的なエッセイを寄稿することになったが、正直このような拙い文章で良かったのか分からないし自信もない。実は、退官記念雑集への寄稿は初めてで、もしかしたら最初で最後なのかもしれない。書き終わってみて思うのは、約3年の間に林田先生からは本当に多くのことを学ばせていただいていたし様々な良縁をいただいていたんだなということに対する驚きと感謝である。同じフロアにいた林田先生がいなくなってしまうのは寂しいが、時代はオンラインなので、定年退職後もご指導いただけるものと信じている。来年度のオンライン公開授業には是非とも参加していただき、有益なコメントとエールをいただければ幸いである。林田先生、おつかれさまでした。ありがとうございました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

## 参考文献

- 家島明彦(2019). 国立総合大学の教養教育におけるキャリア教育科目の開発.
- 永作稔・三保紀裕(編)『大学におけるキャリア教育とは何か—7人の若手教員による挑戦』ナカニシヤ出版(pp.3-28)